

只見の古民家は何の木でつくられているのか～その伝統知の解明と継承

井田秀行（信州大・教育）・阿部伶奈（信州大・院・理工1年）

若林邦生（信州大・教育4年）・土本俊和（信州大・工）

I. はじめに

只見町の古民家に使われている木材の種類は何で、どこから伐り出されたのか、また、それは誰によって行われ、木材供給地となった森林ではどのような管理がなされていたのかといった民家普請に関わる伝統的な知識（伝統知）について、古民家実測調査・聞き取り調査・植物群落調査によって明らかにすることが本研究の目的である。このような、土地の気候風土に順応しながら地域に根付いてきた伝統知は、持続可能な社会の発展において重要な役割を果たすものとして世界的に見直されてきている。しかし、約150棟の古民家が残る只見町では年2～3棟のペースでその放棄や解体が進む。過疎化や高齢化も深刻となっており民家普請に関する伝統知が失われるのも時間の問題である。

これまで発表者らは民家普請に関わる伝統知の保存と活用を図る上で必要となる情報基盤を整えるため、只見町の学術調査研究助成金(2015年度)およびユネスコエコパーク関連事業(2016～2019年度)により、同町の古民家の実態調査を実施してきた。その継続研究課題として今回は、さらに新たな成果を加えて従来の結果を捕捉し、只見地域の伝統知をより体系的に示す。

II. 調査地と調査方法

1. 調査対象の古民家

七十苧地区（只見町大字小林）と下村地区（只見町大字小川）の古民家2棟を調べた。七十苧の家については昨年（2019年9月24～27日、10月24日）に行った実測調査の際に採取した木片から樹種の同定を行った。下村の家については2020年11月21～23日に実測調査と樹種同

定用の木片採取を行った。今回、七十苧の家については樹種同定の結果を、下村の家については実測調査の結果を報告する。なお、下村の家の使用樹種の同定は来年度に実施する。

2. 実測調査と構成部材の樹種の同定

実測調査により平面図・断面図・配置図を作成し、柱や梁などの構造材の断面寸法（長さは図面より算出）を計測した。また、樹種同定のための木片を危険箇所を除いてできるだけ多くの部材から専用工具を用いて採取した。樹種の同定は研究室において、木片から木口・柃目・板目の3面の薄片をミクロトームで作成し、プレパラートにしたものを光学顕微鏡で観察することで行った。

3. 聞き取り調査

5棟の古民家（亀岡地区3棟、布沢地区1棟、塩沢地区1棟）と1棟の寺（塩沢地区・医王寺）を対象とし、古民家については住人に、寺については総代に聞き取り調査を行った（2020年9月23・24日、11月28日）。聞き取り項目は、建築年代・部材の木材種・木材の産地・屋根茅の種類・茅場の場所・職人等についてである。

4. キタゴヨウ林の調査

山の尾根筋上に並ぶキタゴヨウ林は只見町を特徴づける植物群落であり、同樹種は只見町の古民家の建材に多用されていることが発表者らのこれまでの調査から明らかとなっている。そこで今回、かつて用材が切り出されていたと考えられるキタゴヨウ林の森林構造を把握するため、亀岡地区内にある山地の尾根沿い約700m

(標高約 450～660m) にわたり 5 m×5 mないし 2.5 m×10 mの調査区を計 20 箇所設置し、樹木(樹高≧3 m)の組成とサイズ構成を調べ、下層(高さ<3 m)の出現植物種を記録した。

Ⅲ. 結果

1. 古民家の樹種組成と建築的特徴

七十苅の家の樹種組成：当民家は、かつては曲がり屋だったが中門部分が減築され現在は一方屋となっている。樹種が同定できた木片は 308 部材(全部材の 8～9 割程度と推定)で累計材積 23.22 m³であった。樹種は材積の多い順にスギ(222 部材、18.98 m³)、キタゴヨウ(65 部材、3.67 m³)、ホオノキ(7 部材、0.30 m³)、ケヤキ(5 部材、0.10 m³)、ブナ(3 部材、0.07 m³)、ミズナラ(2 部材、0.06 m³)、クリ(3 部材、0.03 m³)、アカマツ(1 部材、0.01 m³)の計 8 種であった。当該民家ではスギが構造の主体を成し、キタゴヨウは特に太い柱や梁に使われていた。その他の樹種は、化粧材・敷居・梁といった箇所で使用されていた。

下村の家の建築的特徴(図 1)：中門造りで、中門部分はかつてウマヤとして使用されていた。主屋南側には倉庫が増築されている。

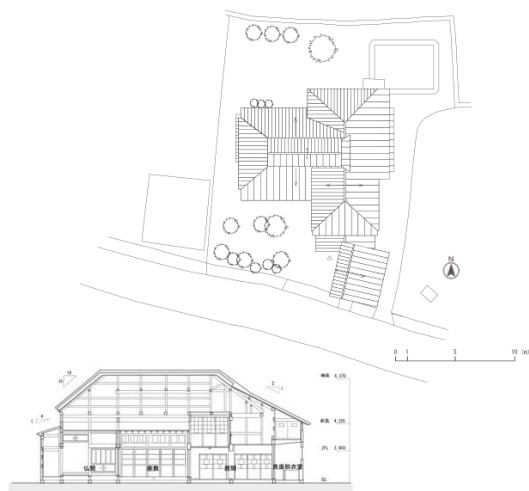


図 1. 下村の家の配置図(上)と桁行断面図(下)

2. 民家普請に関する聞き取り

聞き取りから得られた民家の使用樹種は、ス

ギ・キタゴヨウ・ケヤキ・ナラ・クリ・アカマツ・ブナ・ホオノキ・エンジュであった。建材は近くの山林から「モトヤマ」と呼ばれる職人により適材が選ばれていた。大工は越後(新潟県)の職人やその弟子であった。屋根茅はススキで周辺の茅場や山で毎年刈られ、数年～30 年毎に地域住民で修理や葺き替えが行われていた。また、古民家は残して欲しいが後継ぎや維持費を考えると難しいという回答が多かった。

3. キタゴヨウ林の森林構造

樹木の優占度合いを、胸高直径(高さ 130cm での直径)の断面積を合計した値でみると、キタゴヨウが調査区全体の 82%を占めていた。次いでアカマツが 13%で、その他(11 種)はいずれも 3%未満であった。キタゴヨウの最大胸高直径は 60cm で、直径階級 10～20 cmの中径木が最多を示し、次に多かったのは 10cm 未満の小径木であった。林床のキタゴヨウの稚樹・実生は半数以上の調査プロットで複数個体が認められた。以上からキタゴヨウは尾根上で順調に天然更新がなされていると推察された。

Ⅳ. 考察

今回までに行った 12 棟の古民家実測調査(うち 11 棟で樹種同定)、69 件の聞き取り調査、3 地点のキタゴヨウ林調査の結果から、只見町の民家普請に関する伝統知の特色は以下 3 点に総括される。①只見町では江戸時代中期から昭和初期にかけ、植栽されたスギと尾根筋に自生するキタゴヨウが主に民家の材に使われていた。②モトヤマと呼ばれる職人によって近くの山から適材が選択されていた。③キタゴヨウ林では大径木の適度な利用間伐によって後継樹の更新が促進され、このことがキタゴヨウの持続利用を可能にしていた。

本研究にあたり、ブナセンターおよび只見町の皆様には多大なるご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。